

ハンセン病考える

富山で全国交流集会

真宗大谷派(東本願寺)開放運動推進本部の第11回真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会は13日、富山市の県総合福祉会館で始まり、元患者や支援者ら約370人がハンセン病について考えた。

ハンセン病とイタイイタイ病を共に考えようと初めて富山で開催され、東北学院大の黒坂愛衣助教が、6月に原告が勝訴したハンセン病家族訴訟に触れ、隔離や差別による家族の苦悩などを紹介した。

参加者はイタイイタイ病についても理解を深め、14日は今後の活動指針を示す「富山宣言」を採択する。

偏見や差別問題

理解を深める

ハンセン病全国集会



真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会在13日、富山市の県総合福祉会館で始まり、全国の宗派関係者やハンセン病療



養所入所者ら約370人が、偏見や差別の問題について理解を深めた。14日ま

で。

ハンセン病家族訴訟を支援してきた東北学院大の黒坂愛衣准教授が講演し「写真。いじめや結婚差別など、家族が受けてきた被害を挙げ、「偏見や差別の克服は、苦しんできた人たちの声に社会が耳を傾けられる

かにかかっている」と話した。

「富山から考えるハンセン病問題」病そのものとは別の苦しみをテーマに、ハンセン病と同様に家族が偏見などに苦しんだイタイイタイ病関係者らによるショートレクチャーもあった。